いのちを守る

3.11 大震災における釜石市の課題と教訓
～人的被害ゼロを目標に～

講師：岩手県釜石市　前防災課長　**山田 守**氏

防災講演会

3月1日（金）、町中央公民館において、防災講演会が開催されました。

東日本大震災が発生した当時、岩手県釜石市において防災課長として現場の最前線で対応された山田守氏が講師となり、『3・11大震災における釜石市の課題と教訓～人的被害ゼロを目標に～』を演題に講演が行われました。

講演会には、海岸近くに立地する大丸小学校、菱田中学校の児童生徒をはじめ、消防団員、住民など約200人が集まりました。

釜石市といえば、『釜石の奇跡』『釜石港の防波堤』などでご存知の方も多いと思います。また、街が津波に押し流される映像は、記憶にも新しいのではないでしょうか。

講演では、東日本大震災の悲劇を繰り返さないために今私たちが自らの〝いのちを守る〟ために知っておくべきことについてわかりやすくお話いただきました。

釜石の奇跡

東日本大震災の津波による死者・行方不明者が1000人を超す釜石市で、小中学生の2921人は津波から逃れることができました。学校を休んでいたりした5人が犠牲となりましたが、99.8%の生存率となり、これが『釜石の奇跡』と言われています。

『奇跡』を生んだ同市の防災教育の背景には何があったのでしょうか。

これまで釜石は、明治三陸地震津波（1896年）や昭和三陸地震津波（1933年）など幾度も津波に襲われてきました。

教訓を活かすため、全国に先駆け、自主防災組織の設置・育成、防災訓練の実施、ハザードマップの策定などに取り組んできました。

しかし、避難訓練をしても集まるのは関心がある人だけ。大きな地震が起きても、誰も逃げない。ハザードマップ配布後のアンケートでは、4割を超える人が見ていないことが分かりました。

この意識の低さや危機感のない人々をどうすればよいか考えた際、注目したのが子どもたちでした。

山田氏は、「子どもたちはやがて親となり、そして地域のリーダーになる。子どもから親を変え、親から地域を変えたかった。」と防災教育をはじめた経緯を話しました。

2004年にスタートした防災教育は、ようやく、防災に関する事項が授業などに取り入れられ、地域に広がりはじめた矢先に東日本大震災が発生し、大津波に襲われました。

子どもたちは、互いに声を掛け合い「高いところへ行こう。」と高台を目指しました。さらには、避難所に指定されていた場所でも、津波がくると判断し、さらに上の高台に移動し、九死に一生を得ました。

そして、釜石市内にあるすべての学校の子どもたちが、見事に実行してくれたおかげで、2921人のいのちが守られることになりました。